

## 「曲種に応じた発声」の可能性

### ～ポピュラー音楽を教材とする授業実践に向けて～

永田恭子（福井大学学部生）

吉村治広（福井大学）

#### 目的

子どもたちにとって「生活の音楽」となっているポピュラー音楽を学習に活かすことが求められながら、特にそれを歌唱教材とする場合の発声面の課題を明らかにした実践的研究は見当たらない。そこで本研究は、ポピュラー音楽を教材とした歌唱指導を行う場合、どのような可能性が見出せるのか、その指導の具体を導く上での課題を、将来、授業実践の担い手となる教員養成学部の学生の実態に即して明らかにすることを目的とする。なお、指導の対象は中学生を想定している。

#### 結果

ポピュラー音楽の歌唱において、①伴奏（アレンジ）が変わることにより歌い手の意識が変わること、②音楽経験や音楽嗜好が発声を含む歌唱の技能面に大きく影響することが確認された。また、学生の実態として、ポピュラー音楽を肯定的に捉え、積極的に受容しているものが多数を占めており、声楽的な歌唱の基礎的技能が身につけている学生ほど、ポピュラー音楽の発声への適応度も高かった。

#### 方法

福井大学教育地域科学部の学生同士による模擬授業において、曲のアレンジの変化を契機に学生の歌声が変わった事実を踏まえ、主に音楽科の学生を対象とする複数の調査を行い考察する。

具体的には、「伴奏（アレンジ）が変わると歌い方も変わる」という仮説に基づく2種類のアレンジをした同一曲を歌わせる調査の後、曲に対する深い共感の重要性を指摘した降矢の研究<sup>1)</sup>を参照し「ものまね」と「合唱」を意識して歌わせる調査を行う。さらに、「真似る」行為がもつ指導の可能性を探るべく、曲種によらず声楽的発声をしがちな学生に対し、発声イメージの遠いヴォーカリストの歌を真似てもらう調査を行う。これらの結果を技能と意識の両面から分析し、ポピュラー音楽を教材とする歌唱表現の可能性と課題を考察する。

#### 内容

##### 1. 模擬授業での歌声の変容

平成21年7月に、永田を含む同学年の4人で立案した「曲種に応じた発声」の理解を目標とする模擬授業を行った。合唱版、アニメソング、ロックなど様々にアレンジされている「翼をください」を教材に取り上げ、聴き比べや歌い比べを通して発声の違いを実感させる展開であったが、教育現場でよく歌われている合唱版とそれ以外のアレンジの違いを際立たせようと、カラオケ気分でもマイクを持ちながら歌う活動も行ったこともあり、合唱版と他のアレンジ曲を歌った際に明らかな表現の違いがみられた。それは、模擬授業を受けた学生の実感のこもった意見からも読み取れた。歌い方の指定がなくても、自然と歌い方が変わったのである。

##### 2. 伴奏と歌い方の関係性に関する調査

模擬授業での歌声の変容から、「伴奏（アレンジ）が変わると歌い方も変わる」という仮説を立て、検証するための調査を行った。対象は6名の女子学生で、大塚愛の「さくらんぼ」（作詞・作曲：愛）のサビ部分を2種類の伴奏にあわせて歌うものである。伴奏を耳にすることによる音楽的な感受による歌声の自然な変容を期待し、調査の目的を話さず行った。また、その変容に影響を与えた要因を調べるため、音楽歴や歌唱中の意識等についてのインタビュー調査も行った。

##### 3. 「真似る」ことによる学習の可能性に関する調査

技能表現における深い共感の影響について。カラオケなどでよく行われる「ものまね」を意識させた歌い方と「合唱風」な歌い方による発声の違いについて比較検討した。対象は3名の女子学生と2名の男子学生で、合唱版の楽譜が出版されている曲を歌う。女子学生は加藤ミリヤの「Aitai」（作詞・作曲：Miliyah）、男子学生はEXILEの「道」（作詞：Shogo Kishida 作曲：miwa furus）のそれぞれ1番冒頭部分を「ヴォーカリストのものまねをして歌う」また、「合唱風に歌う」の2種類の歌い方で歌わせた。歌い方を指定したにも関わらずはっきりとした変化のみられなかった3名の学生については、「合唱風」の発声状態を確認するため、合唱版の伴奏にあわせて「翼をください」を「合唱風」に歌ってもらう追加調査を行った。

##### 4. 発声のイメージに基づく指導の可能性に関する調査

「ものまね」による「曲種に応じた発声」の効率的な学習方法を確認するため、「さくらんぼ」を用いた最初の調査において、ただ一人2種類のアレンジに関わらずどちらも声楽的な歌唱をした学生に対し、本人が深い共感を持ち、声のイメージがなるべく離れているヴォーカリストの曲を「ものまね」「合唱風」の2つの歌い方で歌わせる調査を行った。本人へのインタビュー結果から、絢香の「Real voice」(作詞：絢香 作曲：西尾芳彦)を歌唱曲に選択した。

## 5. 各調査結果と分析

### (1) 伴奏と歌い方の関係

まず模擬授業の様子から立てた仮説「伴奏(アレンジ)が変われば歌い方も変わる」については、「さくらんぼ」を6名中2名がポピュラーヴォーカル風と声楽風に歌い分け、3名が両方ともポピュラーヴォーカル風に歌い、1名が両方とも声楽風に歌うという結果から、この調査結果のみで仮説を立証することはできなかった。しかし、インタビュー調査より、「伴奏(アレンジ)が変われば歌い手の意識も変わる」ということが対象学生全員に対して言えることがわかった。その意識が、発声面やそれ以外の技能面に影響することで歌声に変化を与え、結果として歌い分けがなされると推測できた。

### (2) 「真似る」ことによる学習の可能性

伴奏(アレンジ)が歌い手の意識を変えとしても、実際にはその意識がどのように感受され、理解されているのかによって発声他の歌唱表現が異なってくる。「Aitai」を歌った調査では、1名がポピュラーヴォーカル風と合唱風の発声を使い分け、1名が両方ともポピュラーヴォーカル風に、1名が両方とも合唱風の発声で歌った。「道」を歌った学生も、1名が発声を使い分け、1名が両方ともポピュラーヴォーカル風の発声であった。この調査では「曲に対する共感」をキーワードとして歌い分け状況を分析したが、共感があるほど、ものまねすることに抵抗を感じることなく歌うことができ、また、声楽に関する専門的な学習経験が豊富であるほど、積み重ねてきた声楽の基礎を用い、発声を工夫して歌うことができていた。一方、曲への共感がない学生はヴォーカリストになりきって歌うことを難しく感じ、普段から聴き慣れたり歌い慣れたりしている曲種の発声で歌う様子がみられた。また、声楽に関する学

習経験が浅いほど、目指す発声をうまく表現することが難しいようだった。これらのことは、ポピュラー音楽を歌唱教材とする際に、子どもたちが共感できる曲を選択することで学習効果が大きく変わることを示唆している。

### (3) 発声のイメージに基づく指導の可能性

深い共感のもてる歌であるほど、ものまねをするに抵抗を感じないという実態から、対象学生の好きな曲で調査を行ったが、結果として、発声面に限っては大きな変化は見られなかった。原因としては、もともとの声質の個性が強いこと、地声で歌うことをほとんどしてこなかったことが挙げられるだろう。一方で、発声以外の技能面では、ストレートな印象を受ける「合唱風」に対し、全体的にヴィブラートがかかっていたり、子音が強調され言葉の入り強く感じられるといった歌い方の変化がみられた。これは多様な音楽の特徴やよさを理解した上での総合的な表現として、発声とは別の技能面の評価が与えられるべきである。

## 6. 考察

今回の調査では、有効な教材選択のあり方を検証するまでは至らなかったものの、歌唱表現をどう知覚・感受・理解しているのかという受容の様相を改善していくことで現実的に対応できることが示唆された。やはり、学習の目的を、異なる発声を体験することを通して音楽観の拡大とすれば、音楽教師を志す学生を対象とした調査で、「さくらんぼ」を5名中4名、「Aitai」「道」を5名中4名がポピュラーヴォーカル風の発声で歌った意味は大きいのである。合唱風に歌えなかった学生は、今後の学部の声楽の授業を通して歌い分けが可能となるはずである。しかし、合唱風で変わらなかった学生に関しては、音楽観の拡大を導くとともに、教材開発・教員養成をめぐる今後の課題が残ったといえるだろう。同時に、学生の意識調査から、これまでの学習経験において「まわりと合わせて歌う」ことに大きく意識を割いてきたことの影響が大きかったことも付記したい。

## 注

- 1) 降矢美紀子「豊かな新しい歌の世界を手に入れるために」<http://furiya-music-material.miyakyo-u.ac.jp>